



行徳河岸

木曾路名所圖會卷之五目錄

- 小川
- 流波山中禪寺
- 府中
- 小畑
- 十三塚
- 間壁川
- 宇都宮
- 小栗
- 真岡
- 小守
- 左田
- 室八島
- 本寺
- 芝
- 五料
- 富田
- 天明
- 合我場
- 椽本
- 安藤川
- 天明釜
- 梁田

谷ヶ原

つりえり

多士の日目れ

うきさき

谷ヶ原の

駒のくらく

難



比叡のつりえり
東西に十里あり
りくくあん
石小谷士峯
小谷原は



大谷原

釜ヶ谷

東の西りの谷とみふかき小川は村南村北のまら小田原城より
白井まで或はついで邑里に過りて田中城にた小見右小見左
田園隙地ありある耕しある玉苗をまきて芝草をまきつて
さぬいぐをわたりあたらふがふ中川は田原の煙草もまき
播種の時より雨を水灌とせりて雨を灌とせりて夏の雨をまき
光のむねくも九種はなす三枝はすのけ草を家長はまき
林園より種多く釜ヶ谷を小前小至種くは野を膝くして夏
あつて風は産す小田園の約六十をうけむすはたけはれ
手紙あつて遊ぶまぬいごとしこれ何れの馬と人かよ物か
公官の御馬を馬寮のふく小田園一駿馬は折をたてありて
親馬動もは其子も小舟小舟もいそいそと競走する馬の
その中次第りばまきの駒人をあつても早く服の芳へ返るは
より西の方を顧みればやや水もや空もいつてあつたふ士奉

本居五十二

白井

あまのう小見右のは原城まきつて見るは又先河原にりておぼえを
まきしやいとも昔の空を隠む斜脚をて小田原全道は六日の
白井は白井
大森まで二里は前之民居殿より七里は小田原まで
三つをてはひりてその中にも奇形なる軒をて一軒は
まき野原に掃を通りて大森へ前よりははるのけり
お舎は地とてて家長も人もあつて農の業もまき
村のけ中小板あり

大森

本居まで又町又野を過りて大森に過りてある菓行の店を
て穂ふるを農家はまきつてまきまき中川は本居へ
藤橋までお居十一里は前之民居まきつて菓店も又
焼入にありては種りお居物にまきつては橋橋は膳房あり
けお舎はへお居所の名はねはまきつては菓店も又

本居

本居



まきく磯の波を白くして五通小今一色ぞたけぬと土佐日記の句に付ふ
わらうししよやくく麻痺身極香雨(注)そ持らう龍波山のりて
赴くよう成之は和作(注)ひまき其やねを言へりらふおろこもて堤
をけりて是食きて先く橋爪をねをちんちんを定程くしあ
夏のそれ暑も河風中流く城波の香味(注)左右の岸にそそりて
の下くそ風生まげふ真流の風おひびくもて夏成をさくきり死
程も形く大河舟のそをさくく龍工類(注)再び河をけりる名ありと同
あれね紅蓮煙管を登りおろしこれ利根川とくふ原(注)龍類川あふ
統波川(注)も流合さく坂東を希(注)もつ坂東の二流をさるるを多
と其首と名ふありし西岸をさくふ南く夕陽あふ傾あは掉のそをさ
渡ふよ舟をさるるおけいせども黒白をりたふ白洲(注)たてふ流は
おあれども真流はふ南く平に勝らうて流日流をさく乾坤得
むしてねと二葉のやく飛んぞ神傍て(注)祈せりて

下
神寄

神寄
明神

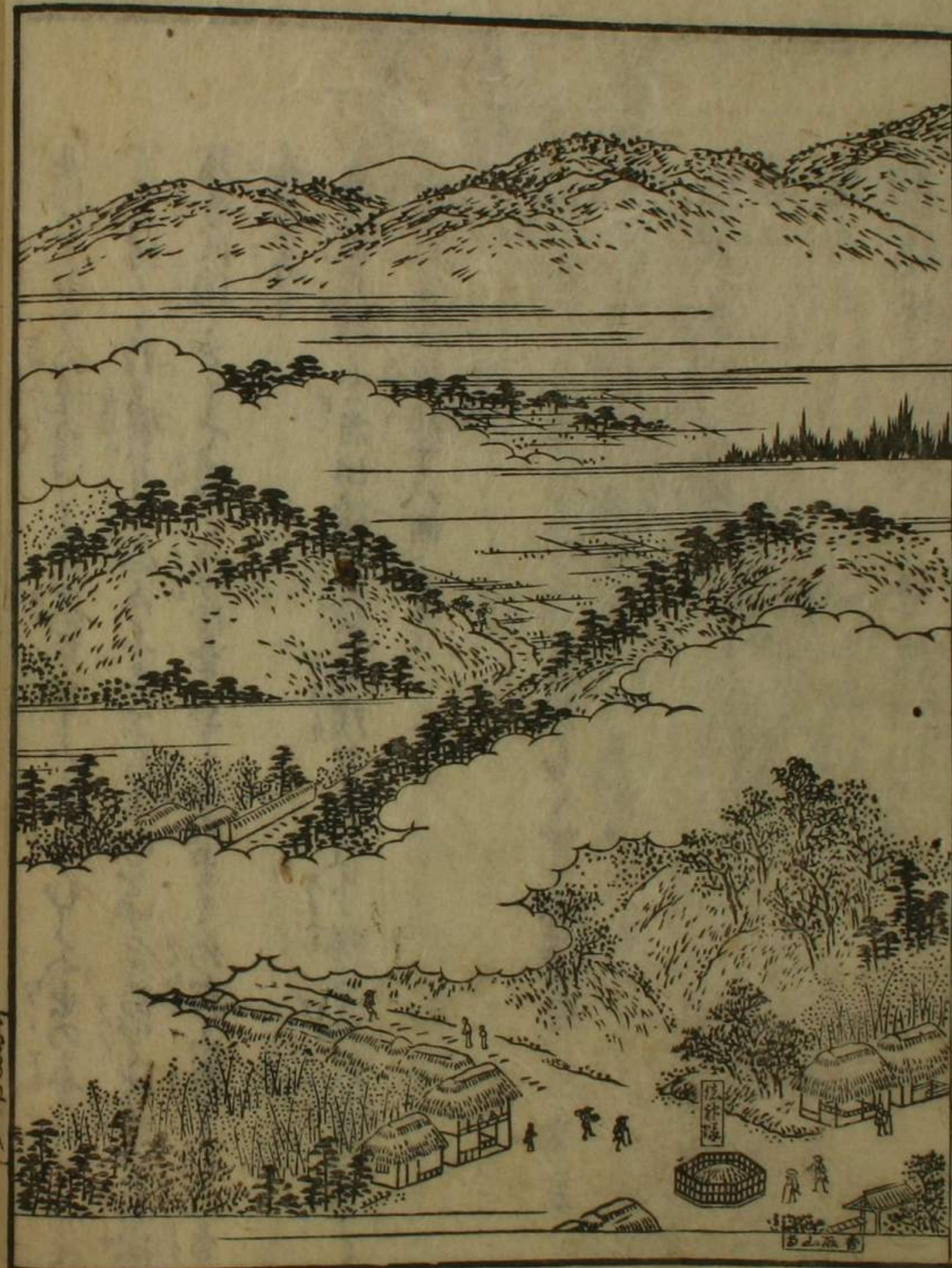
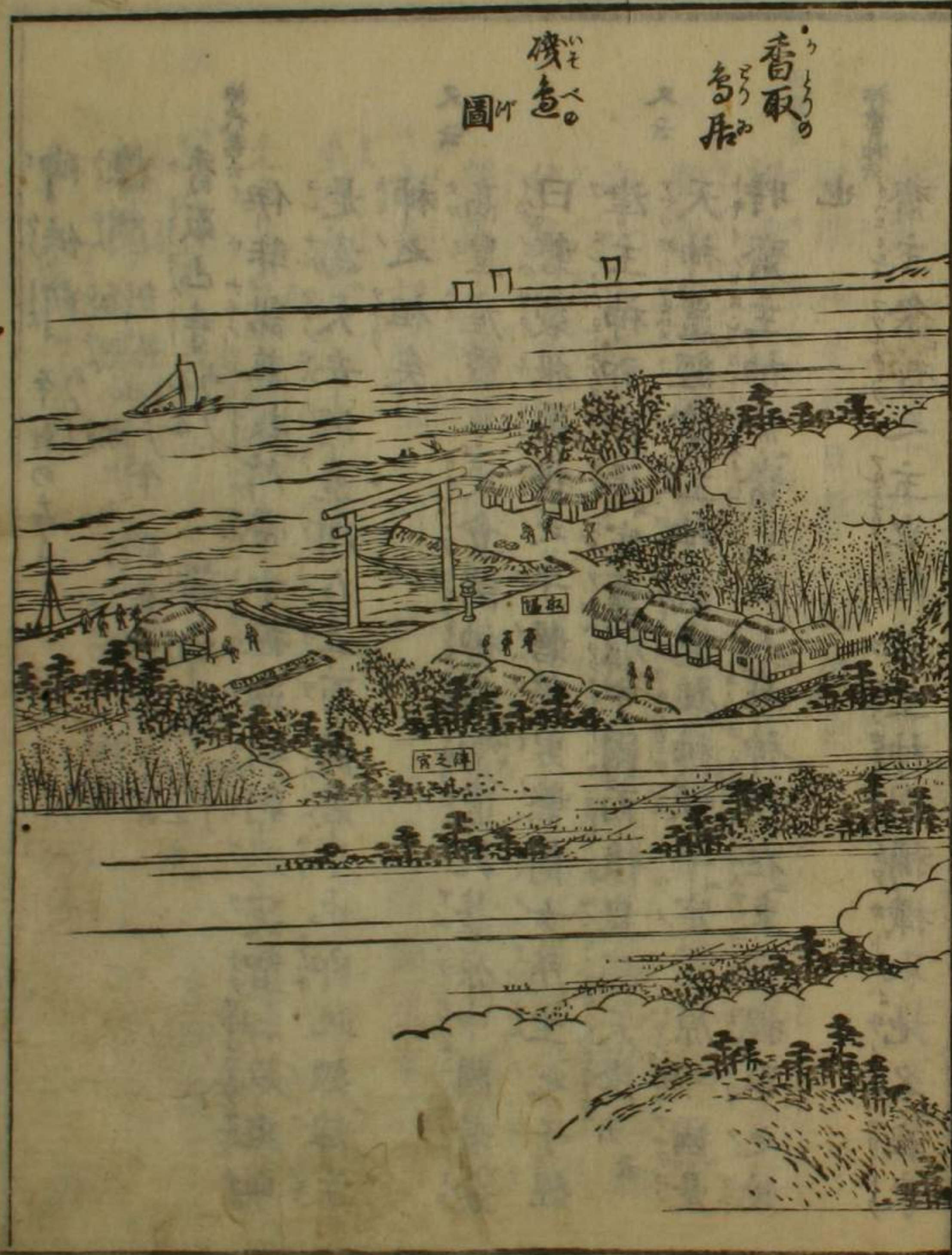
神寄(注)ふねをさるる下(注)てあ中の敷食人(注)一夜をぬく
かろん起りて宮長(注)ふ指と
祭神 惶根尊
末社 五前 神樂殿 御供所 神本あり
此神の杜(注)おろし見ま(注)と森然(注)て大樹(注)あまて熱産(注)のの
神さびる社頭(注)たむあ(注)い殊勝(注)りての(注)くをさ(注)くおわ(注)は看(注)より又(注)お
のわたり(注)小川の(注)幅(注)く都て(注)七八(注)所も(注)あ(注)る(注)中(注)く(注)身(注)く(注)所(注)く(注)小(注)洲(注)傍
の(注)磯(注)あり(注)て(注)菴(注)荒(注)し(注)あ(注)る(注)崎(注)雁(注)洲(注)寄(注)に(注)下(注)り(注)て(注)風(注)来(注)り(注)下(注)り(注)て(注)波(注)風
三(注)子(注)甲(注)長(注)に(注)十(注)二(注)風(注)の(注)お(注)り(注)ひ(注)足(注)目(注)派(注)あ(注)る(注)屋(注)を(注)吊(注)さ(注)る(注)の(注)に(注)候(注)り(注)駐(注)浪
天(注)を(注)浸(注)し(注)潮(注)水(注)月(注)は(注)ま(注)ま(注)く(注)備(注)千(注)頃(注)の(注)波(注)濤(注)あ(注)は(注)る(注)潮(注)荒(注)し(注)て
流(注)是(注)の(注)ま(注)は(注)流(注)り(注)て(注)浸(注)り(注)て(注)ゆ(注)り(注)の(注)船(注)が(注)さ(注)ら(注)り(注)て(注)交(注)易(注)か(注)ん
業(注)が(注)ら(注)ん(注)だ(注)れ(注)又(注)神(注)の(注)社(注)傍(注)を(注)形(注)さ(注)る(注)ふ(注)り(注)を(注)る(注)船(注)工(注)ふ

神寄社

河東
津波比
四万の長尾
柳心舟
えんりさ
こたの
嵐うら
れは



香取の
鳥居
磯
の
遺
蹟
圖



御供所 幸社の有

樓門 豐殿の末にあり 榊園の會堂

香取山寺 諸神塚 日上月

神代卷云

伊弉諾尊拔所帶十握劍斬軻遇突智劍又垂血是為天安河邊所在五百箇磐石也即此經津主神之祖矣

又云

高皇產靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者命曰磐裂根裂神之孫磐筒男磐筒女所生之子經津主神即令平定葦原中國而後皇孫天降云

又云

天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國是時齋主神彌齋之大人此神今在東國撮取之地也

神書抄云

齋主祭神之主也經津主神別稱撮取地名在東

天書云

海道下總國一作香取今為郡名故經津主號香取明神是春日第二神殿也

經津主神者天之鎮神也其先出自諾尊初諾尊斬遇突血成赤霧天下陰闇直達天漢化為三百

六十五度七百八十三磐石是謂星度之精也氣化為神號曰磐裂是謂歲星之精裂生根去是謂

熒惑之精去生磐筒男是謂太白之精男生磐筒女是謂辰星之精女生經津主是謂鎮星之精

是謂社之地也先新嘉也社傳云神代の法有也七神武天皇元奉御宮より海老をく例祭の正月四月八月十月小歳等

いんぐすね社一石大社宜以香取上総分少利友を借芳孫心と云社地廣くして少小法人多門前の老人茶店をわく又所房を

多し夏枯の頃も芝居相撲ありては所の社心とわく

の六社ありて古神不修く文母も神

古神より津之宮の船場も成り又船も亦して萬頃の内天一葉のゆひ
呂見る清水雲根根候へ潤くしてある幸ありて文王を釣の洲あり餅をばて
面小片して釣さるるありて若呂尚の儀ありて文王を釣の洲あり餅をばて
其儀とむれ人様を合人て若小服も板小餅をとりて奥を取福成を以て
人を取て人様獲はるる一少物をとりて川には小魚成持の中餅を以
て國成物も其中と釣る大物とて待てつれ其若國の成度成物なり
ゆひかの翁をばてて船を風小随くゆひのあ雲と連をきりて
風小敷く雲の下くまてつれ之の釣度養をとりて獲の魚成物なり
これ成物なり一盞をとりてけ小中と科陽の成をあらめと萬事量心
なり一釣竿や賞し流く釣度ゆを酒をとりて能工も共と味と風
小成は漕り行ふるありて向ふるありてさる魚なりてこれなり
息栢の海へ候とあり

息栢

息栢大明神 息栢候より一河

息栢大明神 息栢候より一河

末社二社 幸社のほふ 日一社 幸社のほふ

猿田彦社 幸社のほふ 御殿 幸社のほふ

八丈龍王社 幸社のほふ 幸地堂 幸社のほふ

当社を人皇十五代神功皇后東夷征伐の時時南海本北水門小泊を

修へけ時時紅海波小漂泊く進得むむむ力とばく勢もゆきと進ふ武

庫れ海原も成る皇居候く修へけ神也此の神也此の神也此の神也

祀り武甕槌命経津主命孫是東征の將軍とありて其副ありて修へ

皇后されし候の神のての也く時時也ら走りて若易賊成と候



息の栖社



此の還幸の時武甕槌神穴座傳ふと振威主神を攝取小宮とて神
穴座の候申事候ひて崇教他も異なり故小東國二社といふ時穴大蛇王
湖中より陰龍陽統とて二ツ石井と名付て此の穴に金福障り浦出れ
ふ此靈泉より厥后五十一代平城天皇明神とて宗一御ひて大同二年に
月十二日辰辰内曆小勅してまゝ小神祠を建て又陰龍陽統の靈泉の
海中も居の左右に浦出れ湖の中にあつてまゝ其味は清く故小東國の
舟より小舟夕神付成炊もる倭勢國朝越の昭星井と城國賀茂の清子
は井は靈水と日辛三所の名泉と又神寢小龍神社とて所の古視ある
て枝葉の撰れんとて海中小瀬満るに之の視の中はと水成生ト干内
とに又祝も乾く上右と禁裏の寶庫小納りて故尚社建立の事見
まゝ納りたり

遷り葦葎風ふむと遷り葦葎の香ふ成り小白河天小浮人て湯く
まゝ拂ひ入海と辛名と其情にまゝの係あり一小上野國利根川幸
國より大瀬川系依川蠶類川流波川等舎一土人と利根川とてまゝこ
の流四つあり下総國府門二五河内信太の支那の同小牛久の湖とて舎し
又三小下総相馬より一川流是幸國形居るも一流舎は又四つあり
大洲の香取傳麻ありり香取麻は兩郡の界凡度サ半里あり是成
桃子はとて大洋の海はあり

震浦 又香取とも書ん

新橋 白波の流を見れば天の原とてのうた隔るあり

新橋 春草とてあはれとての種中とて事の浦とて名もやまゝん

新橋 妻籠の穴の浦を切りたれをゆと見れば人をまのひは

ゆく川のみまをてたてとてまの穴は浦とておろくも成り

新橋 定家
新橋 後二位
新橋 土御門院
新橋 唯成



鹿島磯色一鳥の井



五十五



高天原 尙社の本十條同小

相傳一麻鹿神者不此神不也群鹿を率く外國の鬼と相闘し
神利ある附と群鹿を率く外國の鬼と相闘し
利ある附と群鹿を率く外國の鬼と相闘し
土人時々其率成るる

御手洗井

幸社より武所井あり傍に古井あり井の底サ十回許
中水清泉湧く

尙社の名はしるの井と賀茂のみ

新系不考其あり傍に清い洗ちあり又之黒雲辨賦天龍宮
殿庫裏池は落守あり又傍に古碑あり

疎くさく神代のみしるの色

鹿島七不思議

要石 降し洗井 赤の川 高天原

神代巻曰

伊弉諾尊斬軻遇突智劍鐔垂血激越為神号曰

又曰

甕速日神次燖速日神其甕速日神是武甕植神
之祖也亦曰甕速日命次燖速日命次武甕植神
高皇產靈尊使經津主神於葦原中國時有天石
窟所住神稜威雄走神之子甕速日神之子燖速
日神燖速日神之子武甕植神此神進日豈唯經
津主神獨為丈夫而吾非丈夫者哉其辭氣慷慨
故以即配經津主神今葦原中國二神降到出
雲國于時大己貴神及其子事代主神共避隱於
是二神誅諸不順鬼神等而後皇孫降日向襲之
高千穂峯

神書抄云

武甕植者常陸國鹿島明神是春日第一神殿也
武甕植者天之進神也其先出自稜威雄走者昔
有天闇霧方四里許其中有小孔化為石窟窟中

天書云



福丸くろ
 ちんちん
 湯あび
 神の
 めくふ
 難向

麻呂
 みろし

11

二月月次神幸七座 所神代持

三月月次神幸七座

日廿日 一万陀神幸

四月朔日より十五日まで奉社平末社神幸

五月奉月の毎日より南月五日まで神幸流落馬あり

六月月次神幸五座

日 晦日 名越後

七月三日 平國の神幸始 浄門出神幸とも云相出

日 七日 七種神幸土用干神寶流馬

日 十日 十一日 十二日 平國神幸

八月 新嘗會神幸

日 月次神幸七座

九月九日 重陽三神幸 相摸會あり

日 月次神幸七座

十月 亥日の神幸

十一月朔日より十五日まで奉宮并奉社神幸

日 月次神幸七座

十二月 初午三日神幸

日 廿七日 養末の神幸

日 月次神幸

下畧

浄経堀 奉社の後あり又井の馬場あり

廣圓寺 奉社の後あり又井の馬場あり

鹿嶋放城 奉社の後あり又井の馬場あり

六郎宗幹あり

御平盛衰記及び製鹽
 麻あは世製新にあり

子種より又新より先皇御成敗の御事なりんを純工小治り日の
 と申すや一多浦風をよく吹来まは浪高河の船をゆきゆく
 こそ千千里をち風のよありを舟りつは船路の形し東あれ舟小
 雲ゆらりやうて風さう海小舟く船成るは楫取らうて成りま
 漕ども押ども舟く早くなかり事あり一舟身小治の事あり成て
 一々運風はう一楫たおをよく板之の方へ運るを成すち先
 麻一海の方へりるべしとらゆりゆり舟の所事なり成りま
 より半里も未はらん小舟一舟もやわらな事ありせし小板入、中
 中らど水まよ腹をまよひ舟一舟もやわらな事ありせし小板入、中
 海もどわい又こ舟もその接くしてはづぬれらるるはづづ方せせよ
 白ひの地は付べしせは純工御成の御事なり一白ひの地は漕り小治方
 てよ所ありこ舟小舟もなうしそ又漕成る事あり一押り小治をり

要石

瓢箪に
 市女
 麻船乃
 うらめ石
 結草
 神乃
 清らう
 千代道



けして延方の町小若く船とあれから敷きつれぬ船よりトマて交度
かぐして常持持せ板久之の道を探りおひは道伴還形はゆき
此人せらるるは湖遊之ぬきひくして至り乃を形舟遊色林を遊て
武里許もゆけを板久之の池つ小着くは池と糸色いとゆきつりし料
かり十二の橋とらあつて西湖の六橋又陽羨縣の橋を長サあむ七十
式丈橋中高くと虹の形ふ似たりこれと申を比し風色の地より
寂居を河中へ送り却り又筋打とらふふにのりてまゝ繩をひき
る俾てて川の向つる山へゆきつりり農務はむは流りあは
ぬかねどは道の都舎の池とらふとて遊女もあつりあつり神傍
ふ是あつたの川竹の奇観つたきけが

人志神あやひやぬせと芳坂の中あなごうんれが子信のゆきも
あがれく幾度立ちきとれとむ乃教の長成くしきぞ二教く
せうらふはてはゆきとらふとこれ満りて年と色しきひひひ

五ノ中廿二

て起もせは絲とせぐあつた妻は教やとぬぬあなとヌマヨくせ
ゆきまふあさる千をれりくねくや
は瀬来ゆい書律ふるもやや南郭先生の歎息の待ありヌマ
ヨくとらふと音小舟とて橋とらふりり教の待ありとらふとと
け所の方言とくや

ヌマヨく出書の養身をあらん

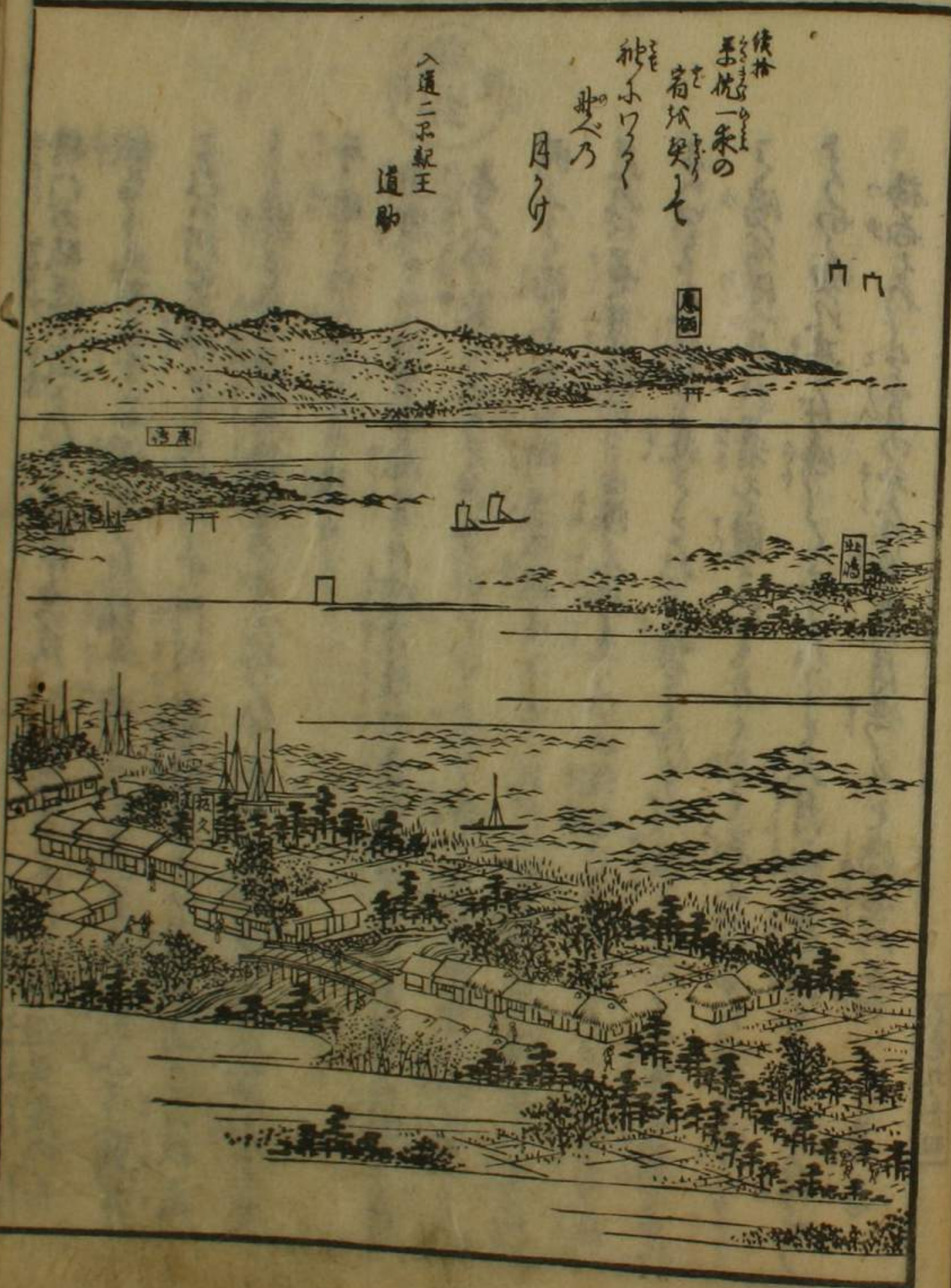
無五 祖風

都くは岩をどうん事ども多くあつたり

常陸 板久

牛堀中を毛里又瀬来とも書ん
小渡りて剛に五所ありも人ま

これら毛里をくりり牛堀て所ふりては毛も何れ方まで
けけ所も又何つた妻は所ありておつた渡りりも人まらつら
都舎の飛とらへる一毛りりゆりゆりては川渡りり土浦城とく
あつりり常陸大板平國音の居り終ふこれ上平を真盛の文



木乃乃廿三

將門の殺運小成され其後より長く變りて今土屋但馬度の居
城より九万五千石領せしれ備牛班より南北方小阿波山へ所有
これ小川を隔てる土地ありて阿波山安穩より小阿波山へ大板屋
とも稱し常陸房海尊の御代に於て又北原實業昨幸あり
牛班より麻生まで築ゆ

常陸 麻生

玉造より四里に麻生と新に後阿波の城中なりを万石領せし所
も人外家もありて所をりて此を常陸里成りて常陸と云
所より海より街道の御所ありて里雜多の酒家之店成
るに六里半ありて海本海ありて小阿波のありて人外家
ありて小阿波を建てこれ小阿波の所なりて常陸と云
る湯谷渡り是れ暑を避く程なりとも西へ傾き六月より
より河内へ其れ長く流るるなりとも六月の末もなりて
梅雨より常陸の所なり六月より常陸と云

是をそんごく小書くありてにそんごくはねをばはるるなり酒
を免答しける者も鶴卵状物にて其れなりて此は豆油状なり
さて此れより方なりて其れなり又此れより月も積りてなり
寒く動りぬ敷物を作りて此れなり其れなり此れなり此れなり
そんごく用事なりて此れなり

常陸 玉造

常陸 小川

常陸 府中

小川より二里に所も此の郡舎の地ありて人も多し所なり
道より葉店所房もなりて此れなり小川の所なり
府中より二里に地を水戸街道ありて所房葉店なり又馬行裏
もあり水戸城下より七里より小川に地ありて葉店なり
小畑より二里に所も郡舎の地ありて人も多し所なり
所房より所房馬よりなりて此れなり道ありて所房馬なり
小畑より二里に所も郡舎の地ありて人も多し所なり
頼む小川順美川田種よりなりて此れなり道は此の所なり

糸神 伊弉諾尊
女辨事社 坂井子娘尊

糸神 伊弉册尊

日讀尊社 月讀尊社 素盞鳥尊 蛭児尊 須山尊

二神 幸原 道原

千手窟 山嶽

安産石 徳盛土

白雲滝 女縣の山

美那濃川 野縣の山中

後流 小泊の石乃

後流 小泊の石乃

後流 小泊の石乃

後流 小泊の石乃

新橋 美那濃川 櫻川

大御堂

三重塔 岡山

薬師堂

求聞持堂

聖天

為産堂

男辨鳥居

...

...

...

...

...

女辨島居

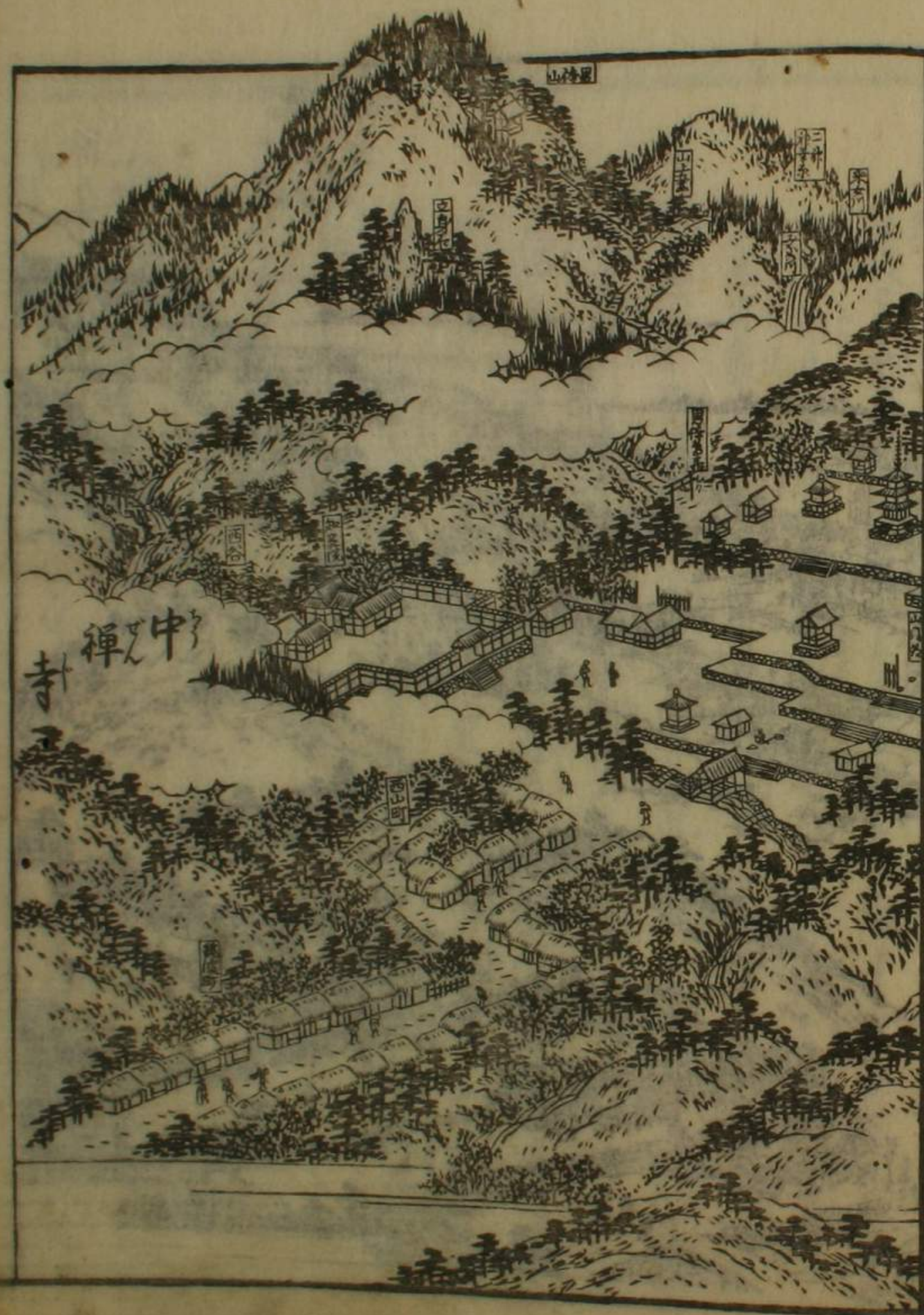
支山は京幸名流と書しゆ東海運流と波のり
坂小堤防を築くは林依遊ふる中より築波中書ん波人
流波と名づく二神登山のりく水波を産信乃海小退け
身一好小兼おきりて後人皇又十代桓武帝の御時法相乃名徳
匠大士はゆふまをこれ重くしゆふ二柱乃清林と勃傳其外
御子面柱のる流鎮府のり千手千眼の大照乃る像影のり
世系乃奇物天賦母達一沼下ゆひ神田二千兩と流傳
神波佛岡傍存にゆふを楚ゆひ造安ゆひ及小大士自千手
親善流彫琢と男伴女伴の御佛ゆひ其及弘仁年中弘法大師
あふ登山ゆひ初登峯ゆひまの暮法を修ゆひまねり
真云祇老乃雲場とて兜率の内院小比一補陀流山と貴ゆふ
男伴女伴此峯より舟川一流乃滝をたぐは流英那流川也

下巻五十八

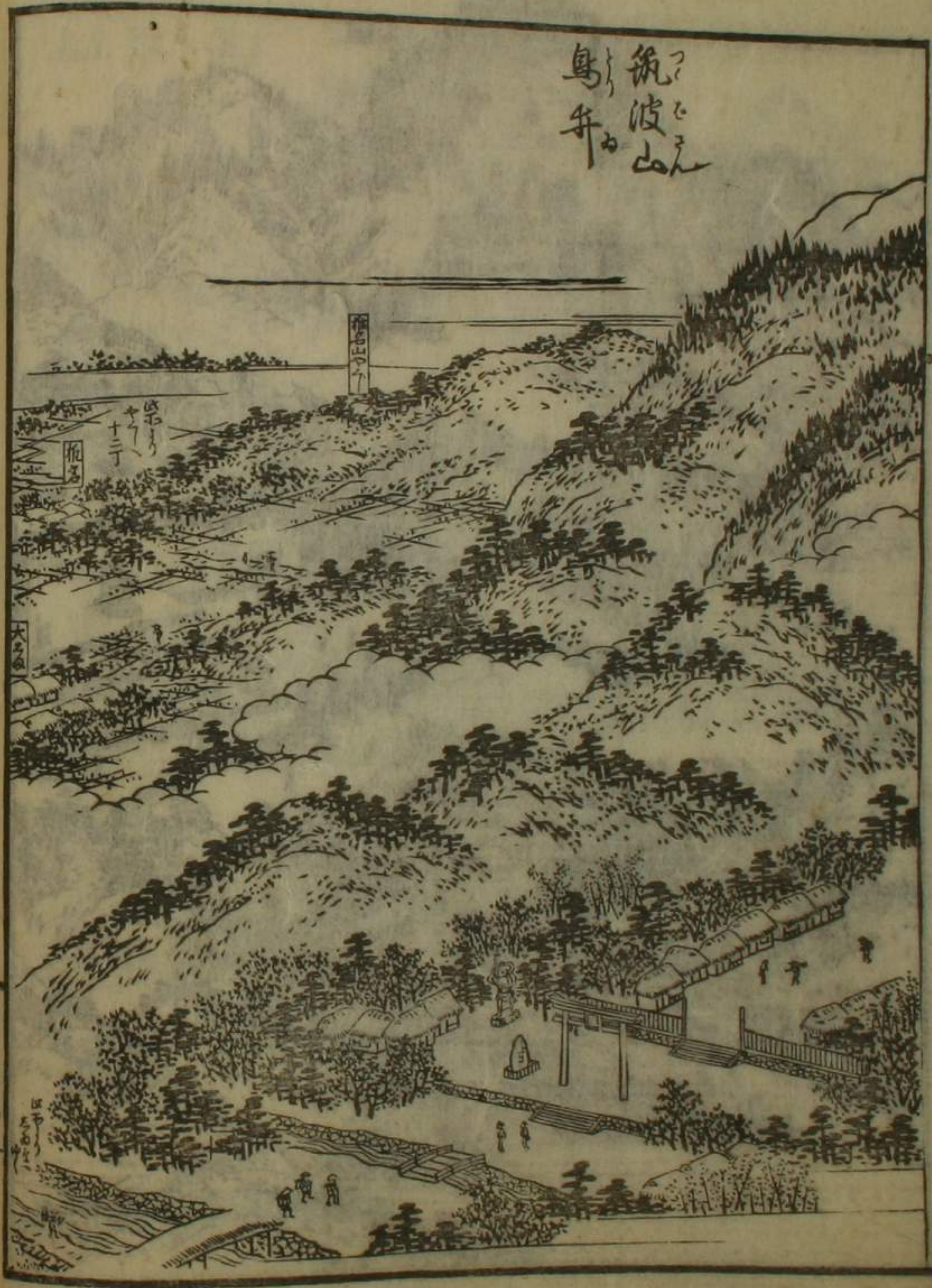
小畑
法雲寺
筑波碑



小畑



鳥居 統波山



推名

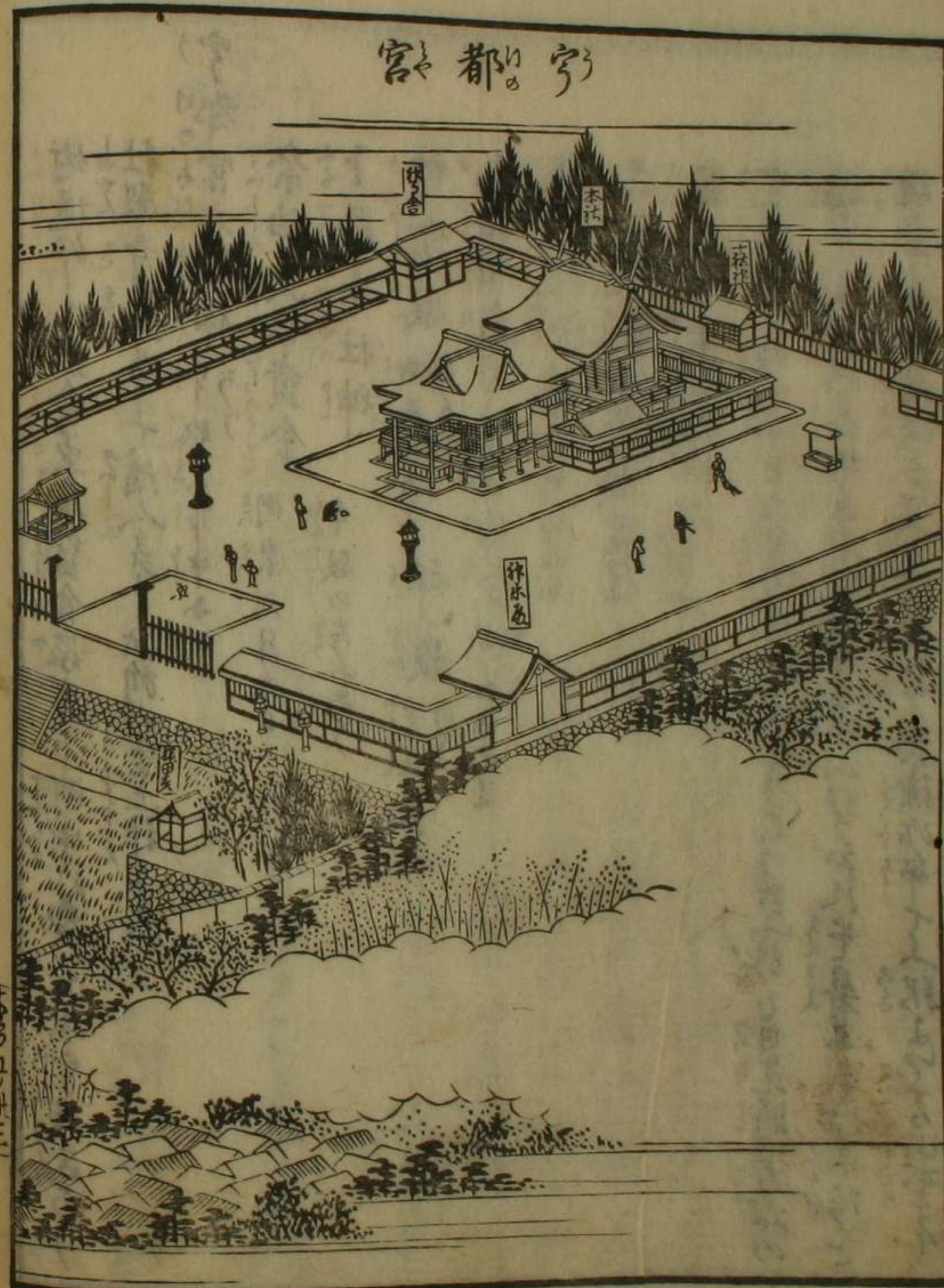
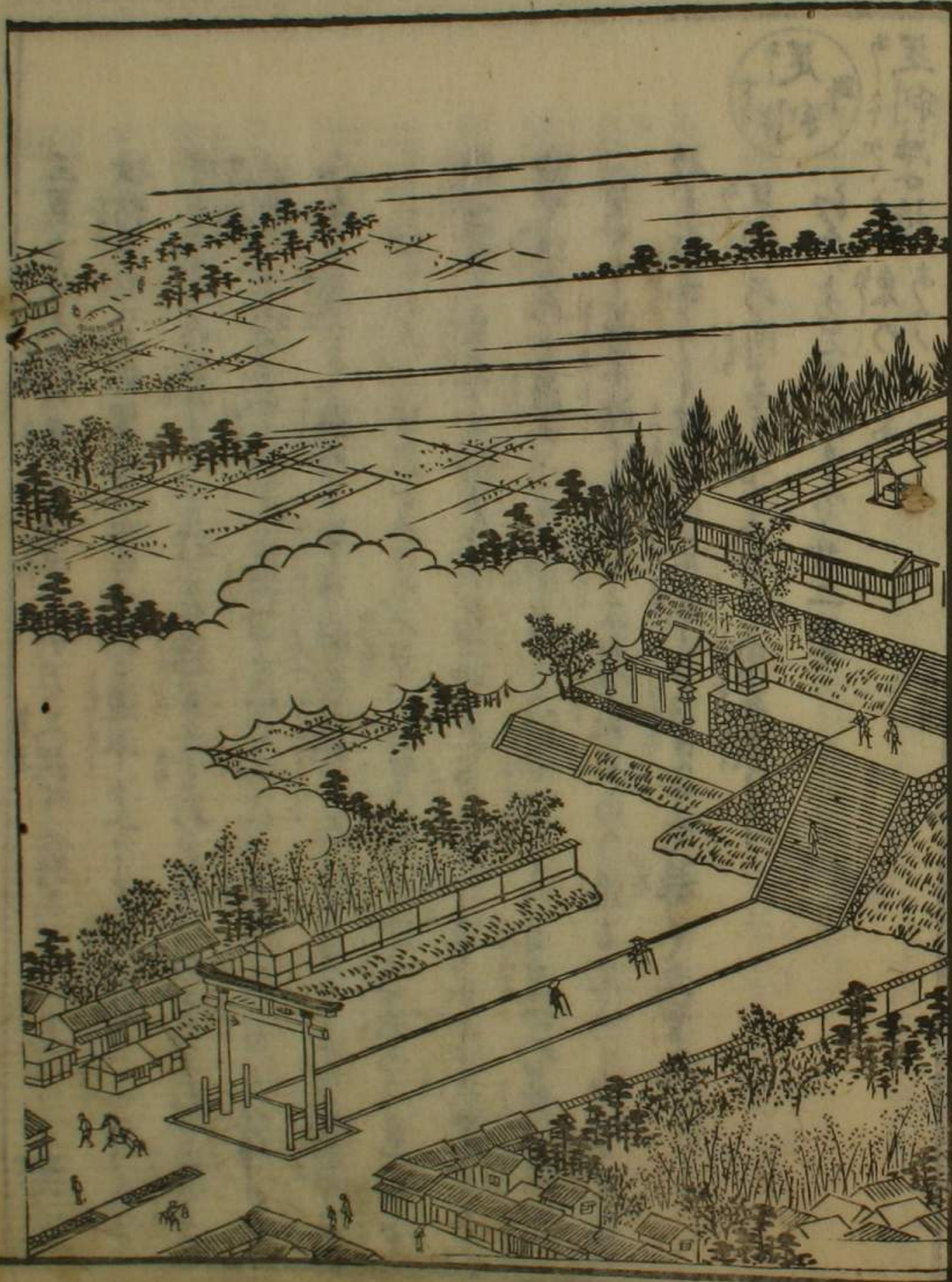
小葉中や四里半これよりりて林野を日くさぬれは所て
道より見るとたてたてはくはせく長と聖なるをく民居有

号はこれ女男の神の霊泉とれがきくきく下とてと名府陰陽
和食の流きありた小山女之境界ありた坂末五里の幸山から特出
東園官家の神降依あり六月の朝鳥居一宿人道は遠くありて
霊嶽とてお徳の道乃神と仰ぐも思れありとてこれの神は統波
山とて澤古の五里山の西南勢開けくありて飛来してるとあり
小舟小葉茶畑本より及瓜中程までとて江府乃高橋を護持流と
号しとて宗に寺ありて寺の式十七百石統波の町長うて寺ありて
房よりありてお徳もまき一先とて遠國の志嶽ありてふかば神降
惠り給ふ

一鳥居 河野あり

雪をさやうさだまのむらたの統波山

嵐雪



二里あり又松の並本然とてりて大沢に所不つるをばり一郷
は所まてい又武里ありやうらと道平ふして左右の並本ぬく
かまぬきの長一々を修する所不中なる形もあなれを風を
山所ぞへなる今市て所へりてあまはは高の形舎とあはれ
人多く賑を賑り一牛陣飯食人拍たあをまき又市へ家も有
てりつこの物を市にさつるへ入る小生通して別道あり是も日光
街通より日光より江戸まで二十四里之うが通より二十六里と
武里通をぬく道あり川と多し今市より日光の入口所石乃河
二里より並本所へ所へ小農家もあり道をなすや一日光街
形もあま一其間字がまより日光まで都て九里
足利乃町吉山下あり東西長一
江戸よりおられまで廿二里
足利野 東の方ふ
足利学校あり

足利野

門二重あり二乃門の間小橋の列樹を種より奥の口内小丸
所廟あり其本小海棠榊梅絲はさうかぞあり
所廟南小向と面六間八四間より所はさく板敷方より白本ばら
りて本は東階西階あり堂上本はもと他より古た聖像安置
座像より長式尺寸許又聖像乃本右は教曾思益乃四配乃
神主あり堂の内は本は蓋蓋蓮豆の下り形も本器あり著格著積
あり神後の箱小房あり著室形りやう又神位の東は方より小房
有本は箱形にありて其内小野堂乃神主あり柁に明大皇乃
所字小野堂は學校を創て即は所を其字同所あり一と小野初
之聖創乃ありて其神主は蓋蓋蓮豆の下り形も本器あり著格著積
憲実再び學校を建て鎌倉の園覺寺より所は本又其は四方
せし所其附より信乃字同と者多しあふ本は其集所又其は四方
運丸ありて足利の學校も度より其憲實鎌倉の令は本

寺に學校と建く和隆の群書は藏光儒書久思印佛書五卷印
と押金沢文庫乃西文字紙張之書以又管原源成氏小至り大分金沢
も類廢して書籍もみからむ小成文庫も名のとほまりそれより聖
書つりて近世は學校生ニ要知者より一傍有り足利の書を携く洛東
一乘寺小僧をニ要ハ願う才辨ありて 將軍家にも相候にせり人
こ種々學校と号に付 官守より種字一萬字と所寄附あり足
利の學校も信持とる傍ハ縁倉建長寺に傍傍たり今も學校と稱と
宗徒信俗徒五六人ありとる信儒書成勅學に付所廟も社領百石
官守より所寄附に聖堂と寛文年中に於より所建立ありまこと
聖廟乃東の方に引とあわく宮庭あり申北正面小茅所を安に又其
西小 國初將軍此所位牌あり
學校の東隣小虚空飛寺あり大寺也堂古一為の方小島山あり菅氏
乃城跡ありやと足利の所を西にば大河あり瀧ら願とるこ種足利の

野上
大田

岡とつたより下野上野の國界なりとせは川上足利より二里半奥小
相生より小所あり為と指とる織田より相生と指の名よりして
及び諸國に地より出る
足利より上列深田へ半里八石と里を田より一里半を田とる
本寄、と里二十町
大田と新田義貞乃古城より小所即新田なりけり小成山育
ありて金山とる新田大炊合義貞より義貞中て長尾志のひ一石
上野國乃信人新田小成郎義貞より八幡を郎義貞家十七代の後
風流家嫡流の名家と指とる平氏世とよりて四海みか威小成とる
折つたれを力あり國東の伴但もはとる金別山のりありとる向とる
なるあふいりなる本寄とる本に及る所執事新田入及義貞家道守
て宮いなるいりへり所平家朝家にはとる平氏世とる
とる所氏これとる所光原とる所平家とる所を指とる

敵感むは 忠美何ぞ 漢くん早く 周東征伐の 謀をせむし
 天下 静謐の 功績 後々 著し 綸旨 亦 仍 執達 也 伴
 元弘三年二月十一日
 左少辨

新田小吉郎左

綸旨の文章家の眉目小体川を編みおれ義貞斜をたねと
 其翌月を虚病して志死幸國をとりける
 山の西の方小義をの寺あり之光院と云寺は三百六十石附之院
 等も宿を知らずといひゆり此村小義貞の一族家久乃左名多し
 山と云田山の麓にあり服屋置と云田乃西本傍の山あり篠塚と云
 の寺も小あり世良田に田由良大能と云田と本傍此間小あり世良田と
 道の御あり小あり大村あり大能と云世良田乃寺ありに田の三村あり
 中に田と道の御あり由良も道のと云なり大井田に河川もけ
 島小ありみかこれ義貞の一族家人の住せしを訓と

日光道
今市駅



本^上野

芝すで二里半十町本寄の南半里徳川より所あり松平の所
祖 徳川四郎義孝此所の所也其後代々此地に住し徳川
村高正百石あり其所の農家は千石あり義貞の後裔新田年々
り之 官家より知り二百石下され徳川の辺村田島村小居村せし
或曰義貞の子孫若松乃以希友知り又百石りれ若松村小居村せし
り之 新田乃希也 上見京成の芝の同小行石の邊あり松平は
利根川の別まづ枝川なりと流れて利根川と申すふあり
五料まぐき里芝と五料の同利根川あり五料の芳川の邊れ上
官家より所番別あり申すは其の所也芝と五料の同徳川あり
芝の川首も本一里半あり申すは其の所也
山と麻橋の上形ありは後希保乃所も赤本山あり名所あり
倉加聖中て三里は同本五村より所ありは倉加聖中と東山
道乃幸街道形あり

芝^上野

五^上料^野

本寄五ノ卅八

下^野八^野野

下野八野より日光初石町より今市まで式里
今市より板橋まで式里 板橋より麻尾まで三里六町
比同本文夾より一里ありあれを板橋なり
麻尾より赤尾系一里あり 赤尾系より金保まで一里あり
金保より左の方へ一里ありは惣社村あり其邑小村あり
其内小野一あり

惣社大明神

惣社大明神

河^野野

河野の所あり申すは其の所也

本寄五ノ卅八

合戦場野

千載 六月廿八日... 合戦場野... 八島と合戦場乃通みあり

本巻五卅九

椽本野

椽本より面田へ七里

富田野

富田より大伏まで三里

大伏より作野の内より町長... 豊家此大なる所なり其家此宅

天明野

天明より大伏まで半里は間大畧町... 長く寺あり

ありは地の生土作り... 二層階建あり... 今の檢地あり

本會... 承...



Handwritten text in vertical columns, possibly a list or record. The text is faint and difficult to decipher, but appears to be organized in a structured manner.

本五甲一

Handwritten mark or character on the left page, possibly a page number or a specific identifier.

樂天堂
佐藤了齋

苑書